

## レスリングを通しての思い出

岩 野 悦 真

私が同志社大学レスリング部を知ったのは昭和二十六年秋である。当時、浪人中であった私は、気晴らしに友人が出演していた関西学生レスリング秋季リーグ戦を観に行った。関大、関学、同志社三校のリーグで、同志社大は、お世辞にも強いとは言えなかった。しかしそのチームカラーの良さ、スマートさが私の心を捕えた。いわゆる「スポーツを楽しむ」という感じが、浪人中の暗い私の心に、忘れ去っていたスポーツの楽しみを思い出させてくれた。試合を観ているうちに、同志社大学レスリング部が、私の人生のスタート地点であると決断させてくれたのである。

昭和二十七年四月、同志社大学入学と同時にレスリング部に入学した。当時の部員は、日野主将以下十数名、一年生は私一名であった。練習場は講武館（現在の中学テニスコートの所であった）にあり、柔道部と共有で、畳の上に綿のキャンバスを敷いて練習していた。午後二時ごろに練習場に行き、キャンバスを敷き掃除するのが新人の私に与えられた仕事で、三〇kgもあるキャンバスを近くの倉庫から出して敷き、練習が終ると又畳んでしまう。これを一人でやるのだからたいへんである。時々練習をサボると翌日は必ずグラウンド二周のうさぎ跳びをさせられた。これも思い出

出の一つである。部員が少ないので、練習が十分にできないことがしばしばあったが、その時には近くで練習していた相撲部や柔道部に行き、四股や鉄砲や投げの練習をしたり、アメリカンフットボールの選手と一緒にランニングやダッシュの練習をしたりしたこともあった。これらは全てレスリングの技術や力の基礎となるもので、以後の選手生活に大いに役立ったようである。

一年生の時の夏に、立教大学・同志社大学レスリング部が、山口県萩市で合同合宿をした。張り切っていた新人時代のことなので特に印象に残っている。三週間ほどの日程なので費用が多くかかる。当時の主務当麻幸雄氏の発案で部員全員がアルバイトをして費用を調達することになった。そのころ明徳館東側半分の建築工事をしていたの目をつけ、工事用の器具運搬や現場の掃除、その他雑用をレスリング部が請け負った。授業のない時間を利用して数名が集まり仕事をやる。授業時間になると講義を受けに行く。一人一人の仕事のノルマは決めず、自由に仕事をしたり講義を受けたりであったが仕事は熱心に行ったように思う。三週間ほどのアルバイト期間で

あったが、先輩とも話し合いもでき、一段と親密感ができて私にとって有意義なアルバイトであった。遠征の結果は、私が一年生ながら立教大の強豪と戦って五勝一敗と頑張ったが、対抗戦では同志社大は立教大に六連敗して遠征合宿は終わった。

同志社EVEの行事は年々多彩になってきているが、私の学生時代には、EVEの行事



全米レスリング選手権会場前で  
(一九五五・四・二)

として、校内ボクシング大会が行われていた。ボクシング部・空手部・拳法部の部員以外なら、一般学生を含めて出場できた。昭和二十九年の大会に、ボクシング部の藤原君たちのコーチを受けて私もレスリング部の代表として出場した。初めてのボクシング試合なので大変緊張していたことを覚えてい。第一回戦の相手はボクシング経験のあるらしい学生、十六オンスのクラブが重く感じられ肩に力が入った。ゴングが鳴り数回打ち合ったように思ったとたんレフリーがストップをかけた。よくみると相手の学生がマットに伸びていた。ボクシングというより軍鶏(シヤモ)の喧嘩のようで、偶然の一発が相手のあごに当たったらしい。二、三回戦ともKOで勝ち優勝戦は、巽五郎君(アメリカン・フット・ボール部)と対戦し、接戦の末判定で勝ち、中量級の優勝者となった。昭和三十年の大会には、軽量・中量・重量の三階級にレスリング部がエントリーし、松本耕之介(軽量)、加藤悍(重量)と私(中量)が優勝し、三階級を制覇した。このボクシング大会は、その後行われていないが、この大会の優勝はレスリング部の自慢の一つである。私の優勝戦の相手は

安藤某君であったが、タフな人で、いくらパンチを打ってもなかなか倒れず、顔中が腫れあがっていたようである。翌年、私が体育講師として実技を担当した時に、クラスの中にその安藤君が居たのには驚いた。

昭和三十年二月三日、学年末試験の最中に、全日本選抜レスリングチームの一員として羽田空港からアメリカ遠征に出発した。約七〇日間にわたってアメリカ全土を転戦、各地のクラブチーム、大学チームと対戦(約十五試合)した。その間、NTC選抜選手権大会に出場、フェザー級第二位、西部選手権大会でも同じくフェザー級で第二位となった。一般家庭や大学の学生寮、YMCA、クラブの練習場の片隅、バス停のベンチ等が主な宿泊所で苦しい貧乏旅行であったが、当時のアメリカの生活を偶々まで見ることができたので、多くのすばらしい経験と勉強をすることができた。この遠征の最終目標は、全米レスリング選手権出場である。私はバンタム級(五十七kg)にエントリーしていたので一〇kgほど体重を減らさねばならず試合の始まる二週間前から、減量という自己との闘いが始まっていた。ニューヨークに二週間滞在してこ

ンディション調整をしていた間に、邦人の人たちが歓迎会や激励会を催して下さったが、私は御馳走を眺めるだけ、しかし時には空腹に堪えられず、誘惑にかられ、どうにでもなれという気になってピフテキを食べ、コーチを心配させたこともあった。試合当日の朝、二百グラム体重オーバー、他の選手がまだ寝ているのにトレーニングシャツを多く着込んで、まだうす暗い寒い街にとび出し、附近の道路をランニングして汗を出した。その時の苦しみ、孤独感言葉では表現できないほどで、十九年過ぎた今でも時々想い出し、私の脳裏から離れていない。この苦しい経験は、その後の生活に大いにプラスになっている。試合中の四日間、パン一個とレモンジュース一杯で頑張った甲斐があり、パンタム級に優勝し、金メダルを獲得した。苦しみの後の喜び、スポーツマンのみが知る勝利の感激の瞬間であった。

帰途ハワイで一週間過ごし、四月中旬帰国、遠征チームの好成績は、当時のマスコミに大きく取りあげられ、羽田空港では大歓迎をうけた。京都に着いた私を驚かせたのは、京都駅前広場での田淵体育課長、松本体育会

委員長を始め、体育会、OB会、レスリング関係者の大歓迎であった。又同志社大学応援団を先頭に、河原町を通って市役所前広場までオープンカーに乗って行進したことである。以後レスリング界から離れられず、レスリングのとりこになってしまった。

(大学法学部助教・体育理論・実技)



## 同志社時報 第50号

- 特集 同志社におけるキリスト教主義教育  
 ……………幸 日出男・杉瀬 祐・津田 能人・野崎 正明  
 中村 幸久・久永 省一
- 評論 私立大学の自主性……………松山 義則  
 若き学徒西田幾多郎の新島観……………秋山 哲治
- えと文 夢みること……………井上 隆夫

随想・新刊紹介・学内消息

1部 100円・年4回発行